

「初冬の高尾山紀行 (5)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

露木先生から連絡があり、キジョランの綿毛の実をご覧になったのは、初めてではなかったようだ。さすがナチュラリストのベテランだ。さて、今の時期の高尾山は、目だった花は咲いていないし、昼の時間帯も短いので、活動時間も限られる。何よりも寒い！



それでも観察すべきものはいくつかある。例えば、薬王院の鐘楼の近くにある、この冬枯れの木は「ボダイジュ (菩提樹)」なのだが、今の時期は葉をすっかり落としてしまっているが、実がなっている。この実の形状が実に面白い。いわゆる「フライング・シード」の一種である。春までこのまま枝についているのだろうか？



12月の寒い日だったが、よく晴れた日曜日だったので、山頂は結構混みあっていた。「高尾山山頂」の碑の前は、記念写真の行列までできていた。

今回の高尾山行は、露木先生は「キジョランの綿毛探し」、私は「変形菌の菌核 (休眠体) 探し」と、目的がはっきりと分かれていた。綿毛は目立つし、美しいが、変形菌の菌核は地味で目立たない。



私はセリア (茗荷谷の 100 円ショップ) で買ったプラスチックケースに、採取した「菌核と思われるもの」を整理して入れながら歩いた。何も知らない人が見れば、ただのゴミにしか見えないだろう。

変形菌 (粘菌) が子孫を残す方法は 2 種類ある。一つは真菌類 (カビやキノコの仲間) と同じように、子実体を形成して胞子を飛ばす方法だ。これは、胞子を遠隔地に拡散して、広範囲に子孫を残す効果があるが、1 個や 2 個の胞子では新たな変形体を創ることは難しく、実はあまり効率が良いとは言えないようだ。私も変形菌の胞子からの発芽を何度も試みたが、さまざまな条件で試しても、一度も成功していない。

もう一つが、菌核 (休眠体) の形成である。これは、子実体をつくるのではなく、変形体そのものが凝集して乾燥した塊になったものである。変形体は移動しながら餌を探すが、気温、水分などの生育環境が悪化すると、菌核となって、じっと待つのである。今、高尾山で採取したものを培養しているが、いくつかは変形体として復活しつつある。何の種類の変形菌かは、子実体が形成されるまでわからないが、それが楽しみだ。